
藍錆色に運ばせて

希羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍錆色に運ばせて

【Nコード】

N9936Y

【作者名】

希羽

【あらすじ】

人間観察の発展である人が殺されるまでを綴るブログ「放課後殺人部」。主人公の宮間季里は自身の書いたブログと現実に起こる事件に違和感を感じ始める・・・

・・・1(前書き)

朗読を前提とした作品で、そんなに長くはしないつもりです。もし
完結までかければ動画作ってupすると思います。

そこでは、藍錆色あいなびいろが今日も放課後の教室を包んでいた。

僕はせっかく日直が締め切ってい行ったその窓を少し開き、乾いた夜の風をほんのり素肌にあびせた。

音も無しに、生徒の吐いた体温は窓の外へと逃げてゆく。

寒いだとか暑いだとか、不快に思うときに一番季節感をとらえる僕にとって、放課後の教室で過ごすこの時間だけはそう、肌をつく10度以下もどこか心地良かった。

嫌いなものが愛おしいことって、あると思う。

目がくらんだ。

暗いままの室内に並ぶ机たちが、薄い斜光を集めては鏡の真似事をするのだ。

僕はその中で一番親しい机に軽く左手を乗せて、遠巻きに窓の外を見る。

そうして愉悦に浸っていると、左腕の袖の上からはめた腕時計が僕に最終下校時刻を思い出させる。

僕は窓を閉めて、教室を後にした。

好きなものが何もないって嫌だよな。

僕らはみんな好きなものをもちたがる。好きな色を決めたかったり、好きな音楽に聴き入ったり、好きな人を探して歩いたり。

でも、好きっていうのはやっぱり、嫌いであることは切り離せ

ない。

高い山に登ってしまえばそれ以外が低く見えるし、逆に海に潜れば陸は頭の上だ。

反対なもの同士が表裏一体でひとりの人間を表す。それって不思議だけど当たり前で、論理的だけど情緒的だと思う。

そして、人の生きると死ぬもその例外じゃないと思うんだ。

下駄箱に向かうと嫌いな冬が僕に身を当てる。

生き方を苦悶の表情で探す旅人たちは、死ぬことに関しては目を背けがちだ。

自分がどんな死に方をしたいか、どんな死に方をさせられるかが、つまり真逆にストリートに答えの的を射ていたりするって話さ。

だから僕は、ある人が死ぬまでを妄想して楽しんだりする。

趣味が悪いと思われるかもしれないけど、もしひとりの人の生き様を考えるなら、それは死に至る経緯を考えると同義じゃないかな？と言いつつもちゃんと用意してある。

下駄箱に後から来た女子生徒が、寒さのせいとか小走りで通り過ぎていった。

それにいつもじゃない。一時の暇つぶし。きつと次の遊びが見つければそちらに精を出す日々になるんだ。

自分局にイニシャルで置き換えた身近な人たちの死に至る経緯を綴ってブログに書いてみると、陰気な日課が意外とやめられないから困る。

それに、今回の遊びはちょっと長引きそうなんだ。

校門をでると、制服の裾が羽ばたいて、マフラーが宙を泳いだ。手加減のない風だ。

僕は身を縮めてひとり帰路を歩きながら、一か月前の出来事を思い出していた。

ちょうど一か月前

学校で女子生徒が一人死んだ。

・・・1(後書き)

ありがとうございました。
感想まっています。

・・・2

・・・2

帰宅後まっ先にパソコンを立ち上げ、身支度をして再びパソコンに向かった。

僕の開設したブログ 「放課後殺人部」は一日にひと桁しか訪れる人のいない超のつく過疎ブログだ。そしてそのひと桁というのも、痛々しいブログ名に惹かれた好奇心旺盛な人や偶然迷い込んだ人が大半だろう。

少し物寂しい気もするけどそれはそれでかまわない。もともとこれは僕が自分の暇つぶし用に作ったものであって、他人に見せる為のものじゃないんだ。作っておいて言うのもなんだけど、フィクションであってもこんな悪趣味な文章を定期的に読みに来る人間の気がしれない。

人間観察の一環なのだから、もっとフランクに銘打っていれば印象も違うだろうけどね。

ブログに書かれていることは、ペンネームだけのプロフィールと好きな洋楽のジャケットを引用した壁紙、そしてひとりの人が誰かに殺されるまでを綴った三人称の物語 　つまりは本文だ。

これが僕の創作物であるということは最初に記載している。分類は小説になっている。

もちろんこんなブログのことは誰にも話していないし、僕の身分を特定できるような要素は何も書いていない。

それもこれも、飽き性の僕が飽きたときにすぐにも捨ててしま

えるようにするためだ。消すつもりこそないけれど、こんな異常趣味を身近な人間に知られてしまえばさすがに人間関係に支障が出るし、これから出会う人たちはなおさらのこと。

「殺人の妄想を書くのが日課でした」なんて履歴書に書いて笑顔で迎えられるのは、その手の病院が僕を凌ぐ上級者の集いくらいだろう。

僕が今までに書いた人たちは誰も彼も身近な人たちがモデルだ。その人の性格や人当たり癖、生い立ち、外見、交友関係などを踏まえて、その人の最期にたどり着く。

その誰もが最終的には、身近な誰かに殺されてしまう。

それは事故であったり、一瞬の憤りであったり、同情であったり、そして恨みであったり。

あつけなく逝ってしまう人、苦しみながら命を絶たれる人、納得して眠りにつく人と心情も多種多様だ。

今までに書き終えた最期は、6人分。

全員にはモデルと同様のイニシャルが割り当てられ、殺人を犯す側の人間はいつも現実にはいない「誰か」だった。

その誰かは僕の知っているモデルの人間関係に入り込んでいて、モデルの本質が一番反映される人物となる。

これは意識して作ったルールじゃないんだけど、なんとなく書きながら自然と生まれた法則だ。

殺す側の人間まで現実と同調させてしまうと物語を広げるのが難しいし、なによりさすがに彼らに申し訳なかった。バレたときのリスクもぶくぶくと太り始めるだろう。

モデルとなる彼らはいつも「被害者」というわけだ。

毎日顔を合わせている人もいるし、仲がいいわけでもなくとも亡くなるのは寂しいと僕が内心感じているのかもしてない。

殺しているのが僕自身なのだからおかしな話だけどね。

そう、それで連続殺人犯の僕が人を殺し始めたきっかけだけど、そんなに大したことじゃない。

気になる女子がいたんだ。

隣のクラスにいた、御船愛。

恋愛感情とかじゃなくて、蚊帳の外から僕が見ていただけだったんだけど、彼女はお人好しな人間だったと思う。それでいてある程度リーダースhipもあり、見た目も大人びていて申し分なかった。特別人気ものではなかったにしても気持ちにやたら余裕をもった雰囲気の人だ。

でも、僕は彼女に他の誰とも違うどこか不思議な魅力を感じてたんだ。

「恋だね」と友人はそんな僕を茶化したけど、なんとというか、触れ合いたいというよりは事実そうしたように遠くから眺めていたいと思わされた。

一見はどこにでもいる女子高生だけど、何故かどうしても彼女が苦しいとか悲しいとか、負の感情を抱いているところが想像できない。これまでに見てきた中にはいないタイプの人間だった。

そして僕は思いついたんだ。

もし、彼女が死んでしまふとしたら、誰かに殺されてしまふとしたら、一体どんな状況だろうか。一体どんな経緯だろうか。それが分かればきつと御船愛という人間がわかる気がしたんだ。

それから一晩かけて、僕は思いつくままに文章を書き上げる。

その中では彼女は何度も危機に陥るが、まるで死ぬ気配がない。そうして最後の最後で、途方もなく大きな力に押しつぶされて彼女のその命は失われてしまふ。

そんな内容だ。

執筆を終えた後、僕はその独りよがりな達成感とちっばけな優越感に浸り、同じように他の人間のことも書いてみたくなった。

そうしてこのブログを立ち上げることになったのだ。

眠気に目をこすっていると口をこじ開けて欠伸が押し出された。

ベットの上で転がっている腕時計は11時付近を示している。

一ヶ月ほど前からはブログを更新していない。

その頃は、ブログを開設して既に半年近く経っていた。

身近なモデルが居なくなってしまうことと、様々なパターンを書き尽くしてしまったこと。単純に飽き始めていたのもあって、毎日の更新が3日に一度になり、やがて週一へ。

それで、暇つぶしの乗り換えを考え始め、本屋に立ち寄って帰ったその日だ。

クラスの友人から回ってきたメールが僕に、目を背けられない事実を伝える。

死んだのは、御船愛だった。

死因は失血死で、首筋に傷があり、あっけなく、綺麗な顔で冷たくなっていったそうだった。

抵抗した様子はないものの、傷の位置や形から殺人の可能性が高いらしい。場所は人気のない河原で、発見されたのは20時頃だという。

翌日学校では集会があり、翌週まで自宅待機が命じられる。

僕はその日からブログを何度も読み返し、書くのを躊躇った。

洒落にならない。こんなにも彼女が、御船愛があっけなくいなくなるなんて思えなかった。僕には信じられなかった。

大切な人でも、愛する人でもなかったけど、何故か大きな喪失感に包み込まれ、悩む僕を馬鹿にするように世の中はこの事件を忘れようとした。

同時に、御船愛は僕の思っているような人間ではなかったということからされる。

不謹慎にも、僕は大きな大きな敗北感を与えられていた。

それがきっかけだろうか。僕の人間観察である殺人ブログは最後の一手が抜けていることに気づく。

僕のこの遊びには答え合わせが抜けていた。僕の知っている彼らと、本当の彼らは違うのかもしれない。それを検証する手段は、おそらくひとつしかない。

しかしその時は、走りかける狂気を奥歯で噛み潰して喉の奥へと

追いやった。

深呼吸をして、左手を人工の光にかざし命の大切さについて考え、反省するうちに眠りに落ちた。

くだらないことを考えたのはそれっきりで、事件の約一ヶ月後の一昨日には僕自身も冷静に疑問を抱くだけとなっていた。

彼女は本当はどんな人間だったのだろうか。僕の見ている周りの人間は、本当に僕の知っているような人間なのだろうか。

それだけをときどき考えて、もとの日常の箱庭を歩き回る。

油断して、なんにも気負いせずに訪れる冬に気を配りながら毎日を過ごす。

だから、一昨日学校で見つかった殺人予告は完全に不意打ちだったわけで、こうして再び更新されないブログを読み返すわけだ。

そして何度読んでもその殺人予告が、僕の想像したある人間の最期のひとつに類似しているように思えてならない。

事件はまだ、終わっていないのだろうか。

僕のこの趣味は、独り歩きして続いてしまうのだろうか。

呑み込んだはずの狂気が、胃の奥で熱を帯び始めた。

・・・2(後書き)

ありがとうございます！
感想まっています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9936y/>

藍錆色に運ばせて

2011年12月1日18時47分発行